

武士と敬神

文學博士 芳賀矢一

唯今は鳥居さんの有益なお話がありました、私の申上げますことは甚だ淺薄なことで、唯一場の談話に過ぎないのであります。鳥居さんがまだいろいろお話があるのに、私の爲に大變お急ぎになりましたことは残念に存じます。私のは自分の感じたことを一寸お話するので、別に新しいこともありません。「紀要」が出ましても、私の話などは載せて戴いては却て恐縮に存じます。

偕て、先日お約束して置きました題は、「武士と敬神」と云ふことであります。大日本は神國なりと云ふことを昔から申しますが、日本人は太古から敬神の國民でありまして、日本の歴史と云ふものが敬神で成立つて居るのであります。我が國の歴史が祭政一致で始まつて居る國であると云ふことは申すまでもない。随つて禮儀作法其の他も皆神祇を祭る事から始まつて居ります。又随つて朝廷と云ふものゝ禮儀が根本になつて、それが故實にもなつて居る有様でありまして、祭政一致と云ふこと、天子様が御祭をなさることが即ちマツリゴトであると云ふことが、今日に至つてもやはり儼然として遺つて居るのであります。一年中の大祭祝日には、天皇陛下自ら御祭をなさる。今日と雖も、祭政一致の有様は元の通

りであつて、日本で神祇を崇敬すると云ふことは即ち國體に於て動かす可からざるものになつて居ります。國家の爲に斃れた人は之を靖國神社に祀ると云ふことになつて居る。宗旨の如何に拘らず靖國神社に祀つて居ると云ふ如きは、宗教と離れて日本の國が昔からの敬神と云ふことで、今日まで來て居るので、祭政一致の國體が依然として今日に遺つて居ると云ふことは、即ち我が萬世一系の國家が在る所以であるのであります。「日本は神國なり」と云ふことが、宗教自由の今日と雖も、依然として遺つて居ると云ふことは確く信じて疑はない所であります。

さて、武士と敬神と云ふ題を出しましたが、鎌倉以後の武士の時代は兵馬の大權が天皇の手を離れて武將の手に移つた時代でありまして、軍人に賜はつた勅諭の中にも、「洵に淺間しき世の様なり」と仰せられて居るのであります。それで、國家の上から申しますれば一種の變つた世の中であつたのであります併しながら其の間に於ても、敬神と云ふことは大に有つたと思ふのであります。之によつて私の申上げ度いのは開闢以來日本人はいつの世にも敬神の念が決して失せなかつたと云ふことであります。それと同時に歴史家の云ふ如くそれ程ひどく幕府が國體を亂したと云ふことではない。兵馬の權が移つたことは甚だ如何はしい點であります。徳川時代の漢學者なり國學者なりが論じた程ではない。あれは實を申せば徳川幕府を倒さうと云ふ考で言つたことが、餘程多かつたのであります。さうして敬神の念を失はなかつたと云ふことは、同時に、一方から見れば皇室に對す尊崇の念も失はなかつたと云つて宜か

らうと思ふのであります。要するに皇室に對しても、神祇に對しても敬虔の念を失はなかつたといはれるとおもひます。支那の歴史を見た眼や、西洋の歴史を見た眼で申しますれば、天下の兵馬の權が幕府に移つたとなると、最早天子は眼中に無いやうに見えるのであります。そこは少し違ふのであります。鎌倉時代以後の武士は神祇を崇敬することを以て寧ろ其道徳を維持して居つたのではないかと考へます。神祇を崇敬すると云ふことは即ち日本では皇室を崇敬することになるのでありますから、決して皇室を尊敬するの念は失はなかつたものであると私は考へて居るのであります。其の點に就いて誰でも知つて居る事實に依つて、簡單に申上げて見たいと思ふのであります。

源平時代の武士が如何にも敵神の念の厚かつたと云ふことは源平盛衰記をお讀みになれば直ぐに分る事でありますが、如何にも神様に就ての記事が澤山あります。神様に恐れた事、神様に對して慎んだこと、又神様を頼みにして事を爲さうとしたことがあるが、殊に日本の國體として、又日本の社會組織の立方として、氏神と云ふものを非常に尊敬する。皇室が伊勢の太廟を尊敬すると同じに一般日本人としてそれ〴〵氏神を尊敬して居る。其の尊敬すると云ふ事柄は自分の祖先の神を尊敬する、自分の家と云ふものが根本である。随つて祖先を尊敬するの念から氏神を尊敬する、源氏や平家と云ふものに就て、特別に氏神と云ふものはありますまいが、源平盛衰記に據て見ましても、平家物語に據つて見ましても先づ源氏は八幡大明神を氏神として居るし、平家では嚴島の明神を氏神として居る。それから藤原氏の氏

神はもとより春日明神であります。かの物語に嚴島の明神が劔を貰つて、其の後に八幡大明神が劔を貰つた、それから後に春日明神が今劔を貰はうと云ふことを夢見よと云ふことがあつて、あれで鎌倉將軍の後に藤原氏から立たれた事がほのめかしてあります。

小さな事柄は特別に申上げまいと思ひますが、此の時分の武將と云ふものが戦争に出ますときには、源平兩氏共に神様を信仰したのであります。木曾義仲が兵を起して初めて信濃の城資長と衝突をしたときに、館六郎親忠と云ふ者が八幡宮の社の前で馬を下つて、弓矢を捨て兜を脱いで伏拜んで、何うか此度の木曾殿の大願が成就するやうにと祈つたと云ふことが、源平盛衰記に見えて居ります。又同じく木曾義仲が例の覺明と云ふ僧をして願文を書かせて戦の勝を祈つたと云ふことが見えて居ります。さう云ふことを數へ舉げれば非常に澤山あります。それから彼の頼朝が石橋山の合戦に敗れまして、例の伏木に隠れました時に、大庭が來て弓を以て穴を探つた、其の時に鎧が弓に觸れたのであるけれども、頼朝が一心に八幡大菩薩を祈念して居つたので、穴から白い鳩が飛び出したので大庭が疑を晴らして去つたと云ふ。是に就ても其の時に頼朝が一心に祈念したと云ふことが見えて居るのであります。又壇の浦の戦に、平家の勢が稍々好くなりました時に、源義經が八幡大菩薩を祈念致しますと、忽ち白い雲が起つて、白い鳩が飛び出した、のみならず白い旗が出て義經の頭の上に翻つた。之を見て源氏の方は非常に喜んだが、平家方は身の毛をよだつて恐れたと云ふことが書いてある。又義經が都落ちをしますときに、男

山八幡宮を遙拜して、自分の身の落ちて行くと云ふことに就て祈つたと云ふことが書いてある。此くの如く源平時代の武士が神様を崇敬したと云ふことから考へても、義経義朝の如き人々を初め皆敬神家であつたと云ふことが見えるのであります。又那須與市が例の弓を射るときにも祈つて居ります。正八幡大菩薩別しては日光宇都宮那須の大明神と謂つて日本國中の神祇を一心籠めて祈つたと云ふことも見え居ります。又神祇に向つて誓ふと云ふやうなことがある。起請文と申しまして神に向つて起請すると云ふことも此の時分から始まつて居る。かう云ふことが鎌倉時代ばかりでなく、例へば足利尊氏が勤王の師を起しました時に、矢張り八幡の神に參詣して、其の時雉子が出たと云ふこともある。又後に桶狹間の合戦の時に織田信長が熱田神宮に參つたと云ふことがある。熱田神宮に參つて、信仰を籠めて居ると、内陣の方で頻りに鐙の音がしたと云ふことが書いてある。此等は皆武將が神を信仰したことを言つたものであります。軍記物語と云つて、半ば小説でありますけれども、兎に角さう云ふ記録がある。

斯う云ふことを考へて見ますと、つまり武將と云ふものが敬神の考があつて、又殊に武將は多くの兵を率ゐて居るから、其神祇を尊敬する事に依つて士氣を鼓舞したと云ふこともあると考へられます。併乍ら唯自分の部下を鼓舞するためにのみ尊敬したのでもない。自分は信仰しないが部下を鼓舞するため信じたのではないやうである。即ち武將其の人が信仰して居つたと云ふことが見える。大軍を率ゐて行くときに、固より勝軍の時には神を拜みますが、自分が落ちるときにも信仰をします。よし一步譲つ

て、武將自らは神に對して尊敬をしないが、部下の爲めにやつたと云ふことにしても、兎に角部下全體が神を信仰したと云ふことが分る、又部下其者がその事に依つて大に奮勵したと云ふことが分る。若し此の話其の者はすべて小説家が作ったと云ふことが言はれるにしても、即ちそれを作つた時代の國民精神と云ふものが察せられます。其の時代にはその事が最も好いと考へられてさう云ふ話が出来たのであります。武將なり、武士なり、又武士ではなくても一般の人民が、鎌倉時代の武士的時代に在つても、敬神の念は決して衰へなかつたと云ふことも考へられるのであります。のみならず又東鑑などの記録から見ても、實際武將が自身神祇を非常に信仰して居つたやうに見えます。殊に頼朝は寧ろそれを以て一つの模範となつて居つたやうに考へられます。頼朝と云ふ人は實際初から神佛を信仰して居つたが、平家征伐並びに木曾義仲征伐の時に於て、鹿島の大神宮が御出征で味方をなさると云ふことがある。其の時雲の中から鶏の形が出て飛んで行つたと云ふことがあつて、非常に喜んで東の方に向つて禮拜したと云ふことも書いてあります。其の他頼朝は種々な方面に於て神様を尊び佛様を拜んだ事蹟が澤山あります。伊勢の神宮を始め、伊互相摸あたりの社に、いろいろの物を寄附するなどと云ふことは始終やつたことであり、殊に頼朝の由比ヶ濱に建てました八幡宮を今の所に遷し尊敬することに致しました。源平盛衰記等を見ますと、鶴ヶ岡の八幡が繁昌と云ふことに就て源氏の者は非常に喜んだけれども、大相國清盛を始めとして眉を顰めた、即ち源氏が段々盛んになるに云ふことに就て非常に驚いたと書いてあります。

頼朝が八幡宮を崇敬して、八幡宮に依つて源氏の世の中になつた以上は、之を以て武士の崇敬の中心とし、武門の神とすると云ふことになりました。初めは源氏丈けの意味でありましたが、固より源氏が天下を支配して居る以上は、總て源氏の武士である——平家の下に附て居る者もあるけれども總ての武士が源氏の氏神を尊敬すると云ふことになりました、結局幕府の神様、言換へれば武士の神様と云ふやうな具合に八幡宮が變化して來たと云ふ風になつたのであります。

例へば建久三年に源實朝が生れた有様を見ましても、第一に八幡宮に祈つて居る。又其後實朝が大きくなつてから、例の右大臣拜賀の式を行つたと云ふ事柄にしても八幡宮が中心になつて居る。恰も皇室が伊勢の太廟を尊ばれる如く八幡を中心として居る様子が見えます。是には多少政略と云ふものも加はつて居りませうし、又頼朝のしたことがいろ／＼外の方面から解釋も出來ませうければ、兎に角武家の神として頼朝が實際敬神の人であつことは明白であります。此の時分の敬神と云ふことは、固より神佛混合であります。鎌倉の八幡宮と云ふものもやはり神佛混合でありまして、彼の公曉別當なんと云つて社僧といふものが居つたのです。此の時分の武士の敬神と云ふことは同時に尊神崇佛であつたのであります。それ故頼朝は神を敬すると同時に、或は東大寺を建立し、或は善光寺を營むと云ふやうに、神佛共に尊敬して居つたのであります。それには政略も餘程加つて居り、又罪障消滅と云ふことも加つて居りませう。兄弟まで殺したのであるから幾らか後悔もありませうけれども、元來が敬神崇佛であつたので、

法華經を寫したとか、又毎日勤行するけれども戦が初まつて勤行が出来ないで困ると云ふやうな事も東鑑に見えて居ります。皆其の本心が現はれて居るのであります。其の頼朝のした事が後の幕府の手下になつて來たのであります。頼朝のした事は全く政略も無いとは言へませぬが、自分にも崇敬の念があつたので、其の後の人々は固より幕府の方針として其の前例に依つたのであります。

八幡宮は源氏の氏神があつたが、後には武士の護神となり、一般の武人は八幡大明神を崇敬した。八幡大明神に就てはいろ／＼説があつて、應神天皇だと云ふことが一般の説であります。是は歴史家の方では非常な議論のある所でありますが、兎に角今日では全國に八幡宮と云ふものが澤山ありますし、到る所に八幡と云ふ地名も澤山あります。武の神として居ります。一方に於て菅原道真が文の神とされて居ると同じに、武の神と尊ばれてあります。武士の被る兜の頂上の所に所謂菊座と云ふのがある。即ち天邊アマノヘと言つて居ります。其の天邊を俗に八幡座と云ふ。それは即ち八幡の神が其所に宿つて居ると云ふ考で名が附いたに相違ないので、八幡座或は神宿りとも云ひます。つまり頭の天邊に神が宿る。即ち八幡が居られる、斯う云ふ意味でありまして、武士が戦ふときは自分の頭の上に八幡が留つて居ると云ふ意味で戦つたと云ふ形が見えるのであります。日本から和寇が朝鮮や支那に出掛けましたが、あの和寇は八幡大菩薩と云ふ旗を立て、進んで行つたと云ふ事が書いてあつた。支那ではそれを八幡船と言つた。八幡船が近海を横行したと云ふことになつて居ります。兎に角八幡宮は殆んど武家の神であると

云ふことになつて居ました。

さう云ふ精神がありました、神を尊敬する。殊に氏神を尊敬する。それを擴張して今度は武家の氏神である所の八幡宮を尊敬すると云ふことが武家一般の風になりました。さうしてそれが武士の一つの教訓となつたことと考へます。武家時代に出た種々の教訓がありますが、神様を祭ると云ふことがどれでも第一に説いてあります。貞永式目と云ふものは領地の争などに就ての裁判とか、即ち殆ど今の民法のやうなものでありますが、其の内に第一に神社を主にして祭祀を専らにすべきことと云ふことがある。又足利時代の一條兼良と云ふ人の書いた樵談治要と云ふ書物の中にも、第一に神を尊ぶべきこと、佛法を尊ぶべきことと云ふことが書いてあります。その他北條早雲の家訓、其等にも第一神佛を拜むべきこととあつて、拜むと云ふことは身の行なりと述べてあります。此等の例を挙げますと、近代の人には澤山あります。武田家の家訓を見ても矢張り神佛を敬ふべきことが書いてあり、長曾我部元親の家訓を見ても矢張神を尊敬すべきことが説いてあります。即ち頼朝などが手本になり、又幕府と云ふものが模範になつて、すべて神社を尊敬すると云ふことが、最も大事な事柄になつて居つたやうであります。是は大に考ふべき事でありまして、當時の武士には學問と云ふものも無し、教育法と云ふものも別に無く、無學なものでありますからして、多くは自分の主君より外に何も知らぬと云ふ時代であつたらうと思ひます。さう云ふ時代に、自ら神を尊敬すると云ふ事があると云ふのは、一方から云へば大に武士の精神

教育になつたことであらうと考へるのであります。唯々頼朝のした事は自ら信じたことからしたのでありませう。或は又多少それに依て教育の基礎としようと思ふ考もあつたかも知れませぬが、實際に於ては兎に角神佛崇敬と云ふことが、元來は日本の國民性から出たとであります。それが武士の教育の上に餘程大な結果を持來たしたことゝ考へるのであります。戰をする時に際つても、神が自分と共に居る、即ち神が自分を護つて居ると云ふやうな考があれば、勇氣も日頃に百倍する譯であります。出陣する時に神に祈つて、神が必ず我を護ると云ふやうな考を以て行けば、たい行くのとは非常な違ひであります。又神が我と共に居ると云ふ考があると、決して殘忍なことをしなくなる。何うしても精神と云ふものが正しい方に向つて行き、隨つて亦自分の行動を眞直にしやうと思ふ考にもなりますから、極めて柔順に武將の言ふことを聞く。又自分の私慾の爲に曲つたことをするやうなことがなくなる。又我を忘れて犠牲的に主君に仕へると云ふことにもなる。即ち軍隊の規律と云ふものが其の點から自然出來て行くものと思ひます。殘忍から遠ざかり、私慾掠奪と云ふやうなことから遠ざかる、一般に武士が動もすれば流れ易い所の粗暴からも遠ざかる。神様にお辭儀するには極めて禮儀正しくしなければならぬ。即ち敬虔の念と云ふものが生じて來ますから、同時に軍人と云ふものが自ら己を正しくすると云ふことになつて來るのであります。神祇を尊敬する念があると、決して悪い事が出來ない。一兵卒に至るまで、皆其の考を有つて行動する。是れが鎌倉時代以後の武士の精神にあつたものと思ひます。其れが武家の精神とな

つて、家訓などにも明白に示されて居る如く、武士の服膺したこととなつたのであります。これが學問のない時代に於て、武士の最大なる教訓となつて居つた。つまり國民性の敬神の念を基礎としたことと思ひます。

朝倉敏景の家訓などを見ると斯う云ふことを云つてあります。神社佛閣等を見て廻る時に、先づ馬を留めて能く見て、神社佛閣等が綺麗になつて居るときには立派だと云つて褒めるがよい。少し破損して居るときには氣の毒のやうな言葉を掛けるがよい。さうすると立派だといつて言葉を掛けられた者は喜ぶし、又これは破損して居ると言はれた者は心配をする。領主からさう云ふことを言はれると、直ぐに修復するから、一舉兩得になる。金を掛けずに修復が出来るやうになる、こんなやうな意味が書いてあります。此等は随分づるい方であるが、兎に角下を治めるにも神祇を崇敬しなければ治められないと云ふことを考へたのです。これで見ても武家時代の一般の人民が神祇の尊敬と云ふことを念としたことが分るのであります。それ故領主などは自分が先に立つて土地を寄附し、或は馬を寄附する。神馬を寄附することが昔からありますが、馬の出来ない者は木馬を寄附し、或は繪馬を寄附するやうにも後になりました。後には繪馬も馬でなくて、外のものも書いたやうに、段々と變つて行きましたが、敬神の念は變りません。

要するに武士が神を崇敬するのは、自分の爲のみならず、領民の心を量つてやつたと云ふこともあり

ますが、結局其の考があるから酷いことが出来ない。即ち上に立つ者が自ら憚るやうになる。上も下も神を敬すると云ふ考の下に幾らか制限される。日本の戦争に於ては非常な惨酷と云ふことがない。西洋の歴史其の他に見るが如き恐ろしい話がないと云ふのは、既に各々の頭に神を戴いて居る、仁義の軍であるとして云ふ考が餘程有るのではありますまいか。近頃の支那の様に、張勳の兵が到る處に掠奪を爲し強姦を恣まゝにすると云ふやうなことは、日本の歴史に餘り見ない所であります。さう云ふ次第でありまして、其等のことから遠ざかつて居るやうに初から出来て居るのではないかと、斯う云ふ風に考へるのであります。即ち頼朝が武士の道徳を維持したと云ふことは頼朝の個人の人格と云ふものからして神祇を尊敬したことが餘程手本になつて居る處が多い。のみならず武士と云ふものがあつて八幡宮と云ふものが段々武士の神様になつたと云ふやうな具合で、それが自然に武家の道徳となり、武士道の美と云ふものが其れに因つて出来て来たことかと考へるのであります、其の事を申し上げたのであります。

昔の武士の神祇崇敬の心と云ふものは決して今日に於ても失せて居らぬと思ふ、今日までも現存して居ると思ひます。日露並に日清戦争の時に當つて、多くの國民が戦争に行きまして、後に残りました所の一族の者、家族の者、朋友の者などが心配して祈りますときには矢張り産土の社に祈つたのであります。又其の守札なり何なりを持つて行く。之を持つて行けば彈丸が當らぬと云ふやうな信仰が今日まで遺つて居る。其の事は今日の學問から言つて如何であると云ふことは別問題であります、其の人情と

云ふものは昔から變らぬので、是が即ち日本の兵の強き所以である。外征して、滿洲の野なりに戰つて居て思出す所は即ち故郷であります。その故郷の産土の社に於て神様が自分の身體を守つて居る。其の産土の守札を呉れた人は誰かと云へば我が家族である、朋友であると云ふことを考へるときに於て、其の氏神を中心として思出すことは即ちなつかしい郷土のことである、否日本の國のことであつて、即ち神に對する信念と同時に故郷に對する一種の愛が起る。故郷の愛と云ふものからして、我が親戚故舊に對する愛の心と云ふものが油然として湧いて來る。其の故郷を愛する念を推廣めれば愛國の念と異ならないのであります。此の心があれば、自分は何の爲に戰つて居るかと云ふ考が其處に湧いて來るのであります。非常に其處に慕はしと同時に自分の家名を辱しめぬ様に、自分の親族の爲に、國家の爲に、名を辱しめぬやうに働くと云ふ考が起つて來ます。昔の源平時代の争と云ふものは單に私の争國民間の争であつて、源氏なら源氏と云ふ一つの氏の爲の戰である。けれども其氏神を奉じて、氏神を助けて自分の氏の爲に働くと云ふ考で働くのであります。それが擴充して今日に於ては國家と云ふものになりました。日本の祖先以來守つて來た所の神と云ふものが附いて居ると云ふ考が同時に其處に慕はしい家族、郷里、國家と云ふものが結付いて參ります。其等のあらゆるものが合して一つとなつて、現在に互り、過去に互つて來るかと思ひます。これが即ち日本軍が一種の非常な強味を有つ所以であるかと考へるのであります。これは決して現代に起つたことでなくして矢張り過去の武家時代から變遷して來た一つの

遺り物であると考えるのであります。さう云ふ方に於きましては單に宗教と云ふやうなものより餘程強いと思ふ。宗教と云ふものは自分が死でから未來が何う云ふ風になると云ふやうに、死んでから先の安心立命である、それよりも現在の自分の親戚故舊と云ふものが郷土の念に結付いた敬神の念の方が餘程強い感じを有つと考へるのであります。即ち民族の精神である。日本の敬神の念と云ふものは民族の精神であつて、武家時代に於て一時兵馬の權と云ふものが將軍に移つて了つても其の間に尊王の念が失せなかつた。朝廷に於ける官位が征夷大將軍に進めば喜んで拜受したものであります。國文學の上から見ましても、鎌倉足利時代に於て皇室を讚美した文學は澤山ある。即ち平安朝を慕つた文學は澤山あるけれども、武家時代を讚美した文學と云ふものは現れて居ない。如何なる方面に就いて考へても武家時代を讚美した文學と云ふものは一つもない。即ち斯かる時代に於ても矢張り國民が皇室を尊敬するの念を失はなかつたと云ふことが言へるのであります。それが即ち日本の國民の國民精神であつて、それが武家時代の教育の根本となつて居つて、根本となつて居つたのが今日まで傳はつて暗々裡に今の軍隊の精神ともなつて居ることゝ考へます。此の點は一般の教育者は勿論のこと、殊に軍人教育等に關係ある人の考ふべきことではないかと感じましたので、其の點を申し上げたのであります。

誠に詰らぬ話でありますが、長い間御清聴を煩はしまして恐縮に堪へませぬ。決して學術上の研究と云ふものでありませぬ。「紀要」などにお載せ下されては却て恐縮に存じます。